

一八八六年一月四日(月)

コシポールの別荘で信者たちと共に

神を求めてナレンドラ、夢中になる

タクール、聖ラーマクリシュナは、コシポールの別荘の二階のいつもの部屋に坐つていらつしやる。南神村ナンキネンヨルのカーリー寺からラーム・チャトジェー氏がタクールの病氣見舞いに来た。そのことを校長と話しておられる——「あそこ(南神村)は今、とても寒いだらうね？」

今日はボウシユ二十一日、月曜日、黒分十四日目。一八八六年一月四日。午後四時を打つたところ。ナレンドラが来てそばに坐つた。タクールは彼の方を時々眺めては、嬉しそうにお笑いになる。——弟子を思う愛情が噴きこぼれているかのようだ。そしてまた、手真似でモニに知らせて下さるのだった——「ナレンドラは泣いていたんだよ！」タクールは少し黙っておられた。そしてまた、モニに身真似で——「家うちから泣きながらここまで来たんだよ！」と知らせて下さった。

みんな黙っていた。今度はナレンドラが口をきつた。

ナレンドラ「あそこに今日、行こうと思つています」

聖ラーマクリシユナ「何処へさ？」

ナレンドラ「南神村へ——ベルの樹台へ。あそこで聖火を燃やそうと思うのです」

聖ラーマクリシユナ「いや、あいつら（寺の北側に隣接している火薬庫の番人）がさせてくれないよ。五聖樹の杜の方がずっといい。大勢のサードウたちが瞑想や称名をしたところだから——。

でも、とても寒いし、真っ暗だし……」

みんな、黙っていた。それからタクールがおっしゃる——

聖ラーマクリシユナ「ナレンドラに向かって笑顔で——勉強しないのかい？」

ナレンドラ「タクールとモニの方を見ながら——今まで勉強したことをすっかり忘れてしまう薬が手に入ったら、どんなに助かるでしょう！」

部屋にいた（年長の）ゴパール氏が言った。——「私も彼といっしょに行きます」

カリパダ（・ゴシユ）がタクールにブドウを持って来ていた。ブドウの箱がタクールのわきに置いてある。タクールはそのブドウを信者たちに分けて下さる。先にナレンドラに少しあげ、そのあとで残りを信者たちのほうに撒いてくださった。信者たちはそれをありがたく拾った。（訳註——タクールがブドウを撒いたのはハリルトと言って、祝福として食べ物撒くインドの風習）

ナレンドラの烈しい求神と離欲

夕方になるとナレンドラは、下の部屋でタバコを吸いながら、モニに自分の現在の心境——どれほ

ど神を求めているか——を話した。そばには誰もいなかった。

ナレンドラ「(モニに向かつて)先週の土曜日、此処で瞑想していたら、突然、胸の中が何とも言えない不思議な気分になりました!」

モニ「クンダリニーが目覚めたのですよ」

ナレンドラ「多分そうでしょう。はつきり感じとれましたから——イダーとピンガラーが。ハズラーに、『胸に手を当ててみてください』と言いました。

昨日の日曜日に行つてあの方にお会いし、そのことを全部話しました。

僕は言いました。『みんな、それぞれ悟っています。僕にも少し悟らせて下さい。みんな成功しているのに、僕だけはだめなんですか?』と」

モニ「あの方は何とおっしゃいました?」

ナレンドラ「こうです——『お前、家のことをちゃんとしてそれから此処へ来れば、すべてうまくいくよ。お前、何を求めているんだね?』」

〔聖ラーマクリシュナとヴェーダーンタ——ニティヤとリーラー、二つとも受け入れる〕

「僕は言いました。——『僕の望みは、三日か四日、三昧に入ったままです! たまに、何か少し食べるに必要な間だけ平常もとに戻る、という具合に!』

すると、あの方はこう言うのです——『お前、狭い根性だね! それよりもっと高い境地があるん

だよ。お前、自分で歌っていたじゃないか——おんみこそ、すべてのすべて——」

モニ「フーム。あの方がいつも言っておられることですが、三昧から下りてきて見ると、神こそが人間、生き物、世界、あらゆるものになつていらつしやる。——神の分身はこういう境地に達し得るのです。でもあの方は、一般の人間はたとえ三昧境に入り得たとしても、下がってくることは不可能だとおっしゃっていますが……」

ナレンドラ「あの方は、僕が家のことをちゃんと片付けてくれば、三昧よりもっと上の境地が得られる、とおっしゃったのです。」

今日午前中、家に行ってきました。家族のものはみんな怒つてこう言うのです。——どこをフラフラうろつきまわっているのか？ 法律の試験が間近に迫っているのに、ちっとも勉強しないであちこちうろついてばかりいる、と」

モニ「お母さんは何とおっしゃいました？」

ナレンドラ「いえ、母は僕に食べさせるのに大忙しで——鹿の肉があつたものですから食べましたけれど——食欲は全くなかった」

モニ「それから？」

ナレンドラ「祖母の家に——その書齋で勉強に行きました。ところが、本をひらくと急に恐ろしくなつて——まるで、学問そのものが恐怖すべき対象でもあるかのような感じでした！ 心臓はドキドキするし！ 今まであんなに悲痛な思いで泣いたことはありません。」

そのあとは本を放り投げて、ただもう走りまわりました。道を走りつづけました。道のどこかで靴も脱げてしまった！ 干し草の山のそばを駆け抜けて——体中干し草だらけになって——僕はもう、ただ走ったんです——コシポールに行く道へと！」

ナレンドラはちよつと黙った。そして又つづける。

ナレンドラ「ヴィヴェーカ・チューターマニ(訳註)を読んで落ち込んでしまいましたよ！ シャンカラ大アチャリヤ師はこう言っておられる——次の三つのもは非常なる苦行と幸運によってのみ獲えられる。

——人間に生まれること。解脱を欲すること。偉大なる魂ひに庇護びごされること。

思えば自分は、この三つに恵まれている！ 多くの苦行の結果——人間に生まれて、多くの苦行の結果——解脱への望みを持つようになり、そして多くの苦行の結果——これほどの偉大なる魂のそばに身を寄せることができたのです」

モニ「アハー！」

ナレンドラ「俗世間にはもう興味がない。世間に住んでいる人たちにも関心がなくなった。一人、二人を除いてはね」

ナレンドラは又、沈黙した。ナレンドラの心の中には、強烈な離欲の精神が燃え上がっているのだ！ 神を求めて命がジタバタしているのだ。ナレンドラは再び話をつづける。

ナレンドラ「モニに向かつて」あなた方は心の平安を得ていらつしやるけれど、僕の魂には落ちて着きがありません。あなたはほんとうに恵まれていらつしやる！」

モニは返答に窮して黙っていた。心の中でタクールが、神を求めて居ても立ってもいられないようになると神に会える、とおっしゃった言葉を思い返していた。日が沈んでからモニは、上の部屋に行った。タクールは眠っておられた。

夜の九時ごろ、タクールのそばにニランジャンとシャシーがいる。タクールは目を覚ましていらっしやる。そして、ぼつり、ぼつりと、ナレンドラの話をなさっていた。

聖ラーマクリシュナ「ナレンドラの今の状態、実にすばらしいね！ ほら、ナレンドラは前には形ある神を信じていなかったんだよ！ それが今は、魂がアップ、アップしている！ あれがいつか話したあの状態——ある人が、『どうすれば神にふれることができますか？』と聞いたらグルは、『私といっしょについてこい。どうしたら神にふれられるか教えてやるから——』と言った。そして、池

(訳註) ヴィヴェーカ・チューターマニ——不二二元論を説いた八世紀のインド最高の哲学者シャンカラの代表作。

ヴィヴェーカは、識別、チューターマニは、宝玉の意。師と弟子との対話の形式をとった五八〇の詩句からなり、師が弟子を解脱へと導く手引き書となっている。ナレンドラが引用したのは詩句三からで、内容は以下の通り——

そして次に述べられる三つは、非常に稀有なものだ

それらは神の恩寵として与えられるものなのだ

それは、人間としての誕生、解放を熟望すること

そして偉大な聖者に師事できることである

(『識別の宝玉』完訳「ヴィヴェーカ・チューターマニ」美莉亜訳／ブイツーソリューション刊より)

のきわに連れて行って弟子の頭を水の中に突つこんだ！ しばらくして手を放してやると弟子に聞いた——『どんな具合だった？』弟子は答えた——『今にも死ぬかと思いましたが！』

神を求めて命がアツプ、アツプするようになったら、あの御方に会うのはもういくらもかからない。明け方になれば——東の空に赤みが差してくれば、もうじきお日様が昇ることがわかる」

タクルの病状は、今日とても悪かった。非常にお苦しそうだ。それでもナレンドラのことを手真似で話しておられる。

ナレンドラはこの夜、南^{ドツキネーショル}神村に行った。新月^{アマヴァーシヤ}の深い闇の中に——。一人、二人の信者がナレンドラといっしょに行つた。モニは夜じゅう別荘にいる。夢の中で彼は、出家たちの集まりの中で坐っていた。

第13章 コシポールの別荘で信者たちと共に